

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第21回 佐野隆治会長⑤
日本人が学び続けていくために



50年間にわたり、神田外語グループの経営をされてきた佐野隆治会長は、「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という建学の理念のもと、日本の若者に必要な教育とは何かを自らに問いかけながら、時代の先駆けとなる英語教育と関連の事業を生み出してきました。佐野隆治会長が経営者として、人として大切にしていること、そして今お感じになっていることについてお聞きしました。

神田外語がやるべきことは、言葉と文化を学び続け、外国人と対等につき合える日本人を育てることです。それは建学したときからずっと変わりません。

人類は銅や鉄を発明して武器を生産できるようになって以来、戦いを続けてきました。日本にも戦国時代があり、江戸時代の末に開国してからは清国、ロシア、アメリカと戦争をしてきました。人間も動物だから、行動範囲が広がると集団どうしの衝突が起きる。でもそれは時間が経つと自然とおさまるものです。地域ごとの集団がそれぞれの文化を持ち、互いに争わない知恵を持つ。人間がもう少し賢くなる時代が訪れると僕は信じています。

世界では今も地域的な紛争が続いています。しかし、長い目で見れば、「戦いの時代」から「理解の時代」に移ろうとしています。だからこそ、外国語を理解し、異文化を理解し、外国人とコミュニケーションできる能力がこれからますます求められるようになる。日本は、武力ではなく経済活動を通じて世界の人と関わっていくと決めているのだから、なおさらのこと異文化コミュニケーションの力が必要なのです。



ただ、今の日本では自国の文化を学ぶ姿勢が失われています。理解というものは、自分がいて、相手がいて成り立つもの。いくら外国語を話せるようになって、自分の中に自身の文化観がなければ外国人との相互理解は成立しません。日本人は日本の文化をもっと学ばなければならぬ。そう強く思います。

日本国内でどんな仕事に就いていても、文化観の異なる人々とコミュニケーションが必要な時代になりました。そして、経済活動が停滞する日本に止まってもチャンスがないのであれば、海外に飛び出していくほかありません。

神田外語では、学院でも、大学でも、日本文化の教育に力を入れてきました。その方針は変わらないし、これからもっと強化していく必要があるでしょう。異文化と日々、向き合いながら生きなければならない若者たちに、日本文化への理解、そして誇りを授けてあげるのは、教育の務めだと僕は思います。(1/6)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第21回 佐野隆治会長⑤
日本人が学び続けていくために



外国語の学習を通じて
学び続ける体質を獲得する

外国語にしても、日本文化にしても習得するには、時間がかかります。特効薬というものはなく、大切なのは学び続ける姿勢を持つことなのです。

神田外語では英語をはじめ外国語の習得で特化してきましたが、外国語というのはあくまで専門技術のひとつに過ぎません。外国語という専門技術の学びを通じて、継続的に学べる習慣を身につける。経済学でも社会学でも、物理学でも何でも、何か専門分野での学びを通じて、学び続ける体質を獲得することが大切なのです。神田外語では、この考え方を「自立学習」と位置づけ、研究と実践を続けてきました。

昭和38（1963）年に僕は両親が立上げた英会話学校の実務を任されました。その時からずっと、「どうしたら学生は英語を学ぶ気持ちになるのだろう？」「どうしたら、学習が続けられるのだろう？」と、そればかりを考えてきました。僕は英語を専門で学んだわけではありませんし、どちらかと言えば苦手でした。でも、だからこそ英語が不得意な学生の気持ちで考えられた。それは英会話学校の経営者としてはとても恵まれたことでした。

第二外国語としての英語教授法を学んだネイティブ教員による指導。異文化理解とコミュニケーション主体の大学。異文化の環境と外国語漬けになれる語学研修センター。自発的に外国語を学ぶ自立学習システムと施設。どれも先例はありませんでしたが、神田外語の学生に提供したいと思って発想し、実現してきた教育手法です。

写真上：神田外語学院の教職員慰安旅行での池田弘一神田外語大学名誉教授と佐野隆治会長（池田弘一氏提供）



写真下：昭和33（1958）年当時の佐野
隆治会長（杉山 美紀氏提供）

僕はいつも発想するのが早すぎるんです。でも、最近では義務教育でも外国人の先生が英語の授業を教えるようになったし、高校ではコミュニケーション英語が必修科目になりました。異文化コミュニケーションの学部を新設したり、自立学習を教育の特色として打ち出す大学も多くなりました。ようやく時代が神田外語に追いついてきた感がありますね。

それぞれの企画を発案したのは僕だったけど、実際の事業をかたちにしたのは僕ではありません。その時、その時、「この仕事は私がやりたい」と思っていただけの方に出会えました。自分がすべきことを、どうしたら実現できるかを考え続け、学び続けていけば、ふさわしい方に必ず出会えるのです。実現しないこと、うまくいかないことがあるとすれば、できないのではなくて、実現していただける方に、まだお会いできていないというだけなのです。（2/6）

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第21回 佐野隆治会長⑤
日本人が学び続けていくために



思い続けていれば人に出会える
すべてを託すことでしか願いは実現しない

本当にたくさんの方々が神田外語のために働いてくれました。

神田外語学院であれだけ多くの専門学科を設立できたのは佐藤武揚さんのおかげです。製薬会社での営業経験を生かして、企業でどんな英語が必要かを調査し、新学科のカリキュラムを作ってくれました。海外からの教員採用を始めてくれたのは、アントン・グディングス先生です。世界中に行ってくれたおかげでハワイ大学ともつながりができて、後に神田外語大学のELIを立上げ、自立学習の中心となるフランシス・ジョンソン先生に出会うことができました。



神田外語大学を立上げたときはYKKです。山本和男さん、北原賢三さん、久保谷富美男さんの3人が中心になって、都心部での大学設置は認めない方針だった文部省を相手にチームワークで戦ってくれた。開学のときには、数多くの先生方が神田外語の可能性にかけて、前職を辞めて移って来てくれました。そして今も、数多くの方々が神田外語のために働いてくれています。



大学では、それぞれの道を究めた先生方が学長を引き受けてくださったので、語学教育だけではなく、神田外語らしい時代に敏感な教育を培っていくことができました。初代学長は小川芳男先生。日本の英語教育界の重鎮です。第2代は言語学の権威の井上和子先生。大学院を創設し、教員の研究力を高めていただきました。第3代学長は石井米雄先生です。アジア言語と文化の研究の第一人者で、胎動する東南アジアへと大学の領域を広げていただきました。そして前学長の赤澤正人先生は外務省出身です。大使まで務められたご経験で、学生が外交の現実にふれる機会を創っていただきました。

「この人だ」と思える方に出会ったら後はお任せします。託すのです。決定権も予算も渡して、でも全責任は自分が持ちます。僕がすべきことは事業の軸が目的からぶれないように見守りながら、芽が出るまでじっくりと待つことです。

人には器量というものがあります。僕には僕の器量があるから、何か新しい事業を興したければ誰かに預けるしかない。そして、誰かの手をお借りして、自分が願っていることが実現すれば、これほど嬉しいことはありません。その方もやりたいことをやっているから嬉しいはずですよ。お互いに幸せなんですよ。

適任者と出会い、仕事を任せ、事業として軌道に乗せるのには時間がかかります。だからこそ、経営がしっかりしていないといけない。収益を確保して、事業に投資ができなければ、いくら高尚な理想を掲げても、事業として実現できません。実現できなければ、学生によい教育を与えてあげることもできません。

任せたもののうまくいかないときだってあります。でも、その時は自分の伝え方、言葉が悪かったと考えます。だから、ちょっと伝え方を工夫してみる。何度か試してみて、それでもうまくいかなかったら、その人とはその事業でご縁がなかったということです。別の事業であれば、うまくいくかもしれません。相手のせいにしてしまうと、自分の中に不平不満が生まれてしまいますからね。まずは、自分を顧みることが必要だと思いますよ。(3/6)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第21回 佐野隆治会長⑤
日本人が学び続けていくために



人が必要とするものを見つけて
学び続けていれば、「時」を感じられる

自分の器量を知るといことはとても大切です。

神田外語大学は1学部のみで1学年の学生数800人です。大学経営者としての僕の器ではこの規模が限界でしょう。日本の大学では、学部ごとに組織が独立していて、2学部あれば、2つの学校があるようなものです。複数の学部をひとつの大学として融合するのは、僕にはできません。

それに、学部が増えて、総合大学になっていくと、大学としての特色が薄まるおそれがある。神田外語大学はまだ、学部を増やす時ではありません。まずは外国語教育で定評を得て、さらにコミュニケーション教育で評価を得る。学部を増やすのは、それをきちんと達成してからではないでしょうか。

人が必要としていることを提供する。それができれば、仕事はうまくいきます。極めてシンプルな原理原則です。神田外語グループの6機関はどれも、「学生や卒業生が何を必要としているのだろうか？」という問いかけに対する答えです。

必要とされていることでも事業を興すにはタイミングを見極めなければなりません。タイミング、つまり「時」は、考えて分かることなく、感覚でつかみ取るものです。学び、考え続けていると、今が「その時」であるということを感じられるのです。



大学の設立に向けて、コンセプトを模索していたときに、古田暁先生に出会いました。古田先生は、欧米で神学の博士号を取られて、パチカンでも研究をしていた。講談社の『英文日本大百科事典』の編集主幹をしており、その当時は誰も知らなかった異文化コミュニケーションを研究されていた。異文化理解とコミュニケーションを核とする大学を創るには最高の人物だと感じて、最初にお会いした場で、「一緒にやりましょう」とお願いしました。

ブリティッシュヒルズの川田雄基館長も、出会ったときに「この人だ！」と確信しました。英国文化を体現する施設に魂を吹き込めるのは、日本と英国の両方の文化に深い造詣を持つ川田さんしかいない。ご本人は乗り気ではなかったようですが、福島の仕事現場まで見に行ってくださいと、「理事長、ミイラ取りがミイラになってしまいましたよ」といい笑顔で館長を引き受けてくれました。

僕はそうやって、瞬間、瞬間で感じて、直観で判断を下してきたんです。(4/6)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第21回 佐野隆治会長⑤
日本人が学び続けていくために



対価をいただくことを否定せずに
しっかりと稼いで、社会に還元する

親父（佐野公一初代学院長）は実業家だったし、おふくろ（佐野きく枝第二代学院長）は小学校の教員でした。英語教育になんて縁はなかった。でも、40歳ぐらいで終戦を迎え、貿易会社を経営するうちに、「これからの日本の若者は外国語を使えるようになって、世界の人たちと仕事ができなければいけない」と思ったようです。日本の若い人たちに外国のことを勉強してもらい、平和な社会を創ってもらいたい。その想いだけで、英語学校を始めたのです。

人が必要とすることを提供する。それが仕事そのものであり、働くということ。 「はたらく」という言葉は、「傍（はた）が楽になる」という表現が語源です。自分が仕事をして、回りの人が少し楽になる。働くという言葉の語源を理解すれば、ほぼすべての仕事は社会貢献とイコールと言えるのです。

ただ、「誰かが楽になるために働く」なんて意識しすぎる必要はありません。目的を強く持ちすぎると、行動が嫌らしくなり、裏目に出るものです。誰でも自分のために働いている。それでいいと思います。きちんとお金を稼いで生活をしていく。そして、多くのお金が入ってきたときは、溜め込まないで社会に還元する。それを続けていけばよいのです。



企業も十分に利益を生んだら、社会福祉に還元すべきです。利益ばかりを追い求めて、社会に貢献しようとしなない企業は、組織が壊れていきます。だから、稼ぐこと、対価をいただくことを否定するのではなく、十分に稼いで世の中に還元していくことを考えたほうが健全だと僕は思います。そうすると、不思議なものでお金はまた集まってくるようになります。

神田外語大学が、一つひとつずつ校舎を増やし、新しい教育システムを導入してこられたのも、たくさんの学生諸君が入学してくれて、きちんと収益が確保できたからです。大学でも、学院でも、その収益を学生にどうやって還元していくかを現場とともに考え、実践してきました。

教育は人間のよい面を引き出していくのが仕事です。教育という仕事に携われる人はとても運がよいと思いますね。運というのは、その人が持っているものです。総務でも、広報でも、営業でも、技術でも、同じ職種であっても、別の業界で仕事をするのとはまったく意味が違います。神田外語は学生のために仕事をする。それはとても幸運なことです。僕は、とても運がよかった、本当に運がよかったと思いますね。(5/6)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第21回 佐野隆治会長⑤
日本人が学び続けていくために



次に何が必要とされるかは、まだ見えない
だから、これからも学び続けていきます

時代の変化とともに、社会に求められるスキルは変わりますが、学び続けるということは変わりありません。学ぶことを生活習慣の一部にしていくための訓練は、家庭でも、義務教育でも行うべきです。でも、いくら声高に理想を語ったところで、すぐに国が動いてくれるわけではありません。

だったら、神田外語グループが率先してやればよいのです。大学、学院で、学習習慣をしっかり身につけ、外国語を話せて、異文化を理解する姿勢を持った若者を毎年約2,000人社会に送り出していく。2,000人の積み重ねはきっと日本を変えていく力になるはずです。

メジャーリーガーのイチローがインタビューでこんなことを言っていました。

「『何かのために』は聞こえは良い。でも時に思い上がっているように思える。人間関係においても言えることだが、誰かの『ために』やろうとすると厄介な問題になることがある。しかし、誰かを『思い』何かをすることには、見返りを求めることもなく、そこに愛情が存在しているから不幸な結果になることが少ないように思う。昨年の3カ月だけだったが、ヤンキースは『思い』を強く持たせてくれた組織だった」



「今はまだ色紙に一言と言われても書けない。大切にする姿勢や哲学はあるが胸を張って一言残せるほどの自分ではない。偉人の言葉を引用する年配の方がいるがあれはダサいと思う。拙い表現でも将来自分の言葉で伝えられたらと思う。しかし結局、言葉とは『何を言うか』ではなく『誰が言うか』に尽きる。その『誰か』に値する生き方をしたい」
(※1)

これからどんな時代が訪れて、そして次は何が必要とされるのでしょうか。僕には、まだ見えていません。だからこそ、その何かがふと見える日まで、僕は学び続けていきたいですね。(6/6)

佐野隆治 (さのりゅうじ)

昭和9 (1934) 年東京生まれ。慶應義塾大学法学部中退。昭和38 (1963) 年、神田外語学院の前身であるセントラル米英語学院の経営に参画、以来、神田外語グループの発展において中心的な役割を果たす。昭和63 (1988) 年に学校法人佐野学園の第3代理事長に就任。平成22 (2010) 年、会長に就任する。平成29 (2017) 年3月永眠。享年82歳。

1. 「イチロー感わず」 (日本経済新聞2013年2月13日39面より)